

縁 の 下 の 力 持

“天文学の裏方さん”の執筆を頼んだところ、“文章を書くなんて、わたしにはとてもじゃありませんよ、勘弁して下さいな”とはにかむ下山さん。その名は徳太郎。4月1日の誕生日で満62歳になるはずであるのに、63歳だと自称するほどに昔気質の人である。

戦争末期に東京を焼け出されて、奥さんの実家のある水沢へ移住したのがきっかけで、昭和22年5月から緯度観測所勤めが始まったというから、間もなく24年になる。

古びた木造館時代の冬場は大変であった。今のスチーム暖房とはほど遠い亜炭ストーブで全館各室を暖めるのであるから、そのお世話は並たいていのことではない。“昔に較べると今はまるで天国みたいです”と下山さんはしみじみとした口調で語る。

水沢には、東京では思いも及ばないほどの積雪がある。今日でこそ大雪の朝には早速除雪の人夫が入るが、昔は通路の雪掻き、観測室屋根の雪落し、すべてが下山さん達3～4人の双肩にかけられていた。屋根の雪落し、特に丸屋根の場合は難しいし、また危険を伴う。この仕事だけは外来の人夫には任せられないので、下山さんとその同僚の本田さんが今でも受持っている。

“ひ”がうまく“ひ”と言えないで“し”と発音する生粋の江戸っ子下山さんは本来ふとん屋さんである。13歳の時から“西川”をふりだしに、ふとん一筋に生きてきたほどの人が緯度観測所に腰を落つけてしまったのも珍らしいが、停年退職後は再びふとんの道に返り咲きたいと語る時、彼の顔立ちは一段と若返る。

東京を焼け出されて水沢へ移った頃の荒々しかった世相を思い浮べる下山さんの顔には長年にわたる苦勞のしわが刻みこまれているが、子供7人を無事育て上げた安堵と自信をその表情から読みとることができる。

7人もの子供さんは今ではそれぞれ立派に成人して独立しており、その中でも長男、次男、次女、三女、四男

の5人がそろって東京に住んでいるのにもかかわらず、空気は汚れ、ゴミゴミした東京にはもう帰りたいくないという。それほどに水沢が好きである。その水沢の緯度観測所構内には、昔はやまどり、くいな等の野鳥の姿がよく見かけられたが、最近では中庭が全面綺麗な芝生になり、藪はとり除かれ、ひば垣の下もきれいに払われて、住む場所がなくなったらしいと、ちょっぴり淋しそう。そういえば春の雪どけと同時にポチッと顔を出す可愛らし落緑のバケも最近では見つけ難くなった。

生来、大工仕事が好きであったとかで、緯度観測所に入るとすぐ木工作业を担当。器用に何でもやっているので重宝がられている。時たまの日食遠征隊はその梱包を手伝って貰い、事務室、研究室内の小修理は勿論、宿舎の手直し等、長年ここに勤務している人なら、大ていは下山さんのお世話になっているはずである。目立たないが、無くてはならない存在、縁の下の力持みないな人である。木工についてはいうまでもなく、印刷でも、郵便局へのお使いでも何でも気軽にやって頂けるので有難い。ただし会計課長さんの承諾を得た上でのことである。下山さんは会計課の一員である。

緯度観測所は世界一の観測所であり、それを自分の誇りとしている下山さんは“わたしには難しい学問のことはさっぱりですが、所員皆さんの手で益々立派な研究所に盛り上げていって下さい”と遠い将来を見つめるまなざしになる。

蝶ネクタイのようにも見える真黒のネックチーフがさりげなくワイシャツの襟元を飾り、左手の薬指に光る金の指輪が印象に残る。かつてふとん職時代には印台に利用していたものがつぶれてしまったが、つい昔の癖ではめてないと物淋しい。そこで新しいカマボコを嵌めているとはおっしゃるが、どうも何か意味がありそうである。

(弓 滋記)